

中晩唐五代の詩格の背景について

愛 甲 弘 志

一 はじめに

詩人はどのようにして生まれるのか。人が詩人として形作られていく過程には様々な要素がそれに与っている。例えば、時代が影響したり、或いは人が影響したりと。そしてまた人は書物を通して影響を受けることができるのである。それは自ずと限界がある人の行動範囲を超えて、異なる時代、異なる空間へと誘ってくれる、はなはだ魅力的にして影響力のあるものである。因って詩人の文学の内実を知ろうとすれば、その人が読んだ書物がどのようなものであったかを探ることから入り込むのは至って有効な手だてであろう。更にはそのような書物を通してその時代や読者層が浮かび上がってくることもある。そこで本稿では中晩唐五代の詩格の書を手掛りに、それらが当時の読者とのように関わっていたかを明らかにし、併せて詩格から宋代の詩話へと繋げしめた要因を論じることによって、詩人たちにとって詩格の書を持つ意義を問い直したい。

二 読書人の青少年期の学習歴について

白楽天は幼少期からの自らの勉学振りについて、かの有名な「元九に与ふるの書」で次のように語っている。

五六歳に及び、便ち詩を爲るを學ぶ。九歳にして聲韻を暗識す。十五六にして始めて進士有るを知り、苦節して讀書す。二十已來、晝には賦を課し、夜には書を課し、間に又た詩を課し、寢息するに遑あらず。以て口舌に瘡を成し、手肘に胝を成すに至る。既に壯なるも膚革豐盈ならず、未だ老いざるに齒髮早に衰白し、瞢瞢然として飛蠅垂珠の眸子中に在る者の如く、動くこと萬を以て數ふ。蓋し學に苦しみ文に力むるを以て致す所、又た自ら悲しむなり。

及五六歳、便學爲詩。九歳暗識聲韻。十五六始知有進士、苦節讀書。二十已來、晝課賦、夜課書、間又課詩、不遑寢息矣。以至于口舌成瘡、手肘成胝。既壯而膚革不豐盈、未老而齒髮早衰白、瞢瞢然如飛蠅垂珠在眸子中者、動以萬數。蓋以苦學力文所致、又自悲矣。（『白氏文集』卷二十七「與元九書」）

この引用文のすぐ前で「僕」の宿習の縁、已に文字の中に在り」と言い切るのは、このような涙ぐましい努力と無縁ではない。そしてまたこの白楽天に限らず、当時の士大夫の子弟たちは皆、間違ひなく同じような学習歴を持っている。例えば、九歳で早死にした白楽天の子供、白幼美についても次のように記している。

白氏の下殤を幼美と曰ひ、小字は金剛奴。……既に生まれながらにして恵にして、既に孩にして敏なり。七歳にして能く詩賦を誦し、八歳にして能く書を読み、琴を鼓（ひ）く。九歳にして不幸にして疾に遇ひ夭す。

白氏下殤曰幼美、小字金剛奴……既生而恵、既孩而敏。七歳能誦詩賦、八歳能讀書、鼓琴。九歳不幸遇疾夭。

（『白氏文集』卷二十五「唐太原白氏之殤墓誌銘并序」）

当時の習いに従って、彼等は貢挙の試験を目指すべく教育されていたのであれば、その勉学振りと聡明さをこのように誇らしげに語るのは宜なることである。

しかし膨大な詩文を残している彼等が、自らの幼少期の細部にまで語ることは驚くほど少なく、その読書体験に関する記録も殆ど無い。⁽¹⁾ 次の晩唐の皮日休の記事はその稀有な例といってもよい。

余、童たりて郷校に在りし時、簡上に杜舍人牧之の集を抄し、「進士嚴憚に與ふ」詩有るを見る。後に吳に至り、一日、客有りて曰く、嚴某と。余、其の名を志すこと久し。遽かに文を懷きて造らる。是に於て得るを樂しむ禮して之を觀れば、其の爲る所は七字に工にして、往往にして清便柔媚なるもの有りて、時に常軌を軼駭すべし。其の佳き者に曰くへ春光冉冉として何れの處にか歸せん」とす、更に花前に一杯を把る。盡日花に問へば花語らず、誰の爲にか零落し誰の爲にか開かん」と。余、之を美めて諷して未だ嘗て怠らず。生、進士に擧げられ、亦た十餘たび計偕す。余、方に之を冤むに、竟に時を得たること有りと謂ひしを。未だ幾ならずして吳興に歸り、後兩月（原注、咸通十一年也）、雪人至りて云へり、生、疾を以て所居に亡くなりき。ああ、生、徒に詞を以て士大夫に聞こゆるも、竟に名あらずして逝けり。豈に止に此にて湮沒せんや。

余爲童在郷校時、簡上抄杜舍人牧之集、見有「與進士嚴憚」詩。後至吳、一日有客曰、嚴某。余志其名久矣。遽懷文見造。於是樂得禮而觀之、其所爲工於七字、往往有清便柔媚、時可軼駭於常軌。其佳者曰へ春光冉冉歸何處、更向花前把一杯。盡日問花花不語、爲誰零落爲誰開。余美之諷而未嘗怠。生擧進士、亦十餘計偕。余方冤之、謂乎竟有得於時也。未幾歸吳興、後兩月（原注、咸通十一年也）、雪人至云、生以疾亡於所居矣。噫、生徒以詞聞於士大夫、竟不名而逝。豈止此而湮沒耶。（『松陵集』卷八 皮日休「傷進士嚴子重詩并序」）

皮日休の生卒年については諸説有るが、咸通七年（八六六）に貢挙を受験し不合格になっていることから、ここ

では〈余爲童在郷校時〉がそれ以前のことであったこと、そして嚴惲については原注に明示されるように〈咸通十一年（八七〇）〉に亡くなるまで何度も中央試験（省試）に臨んだということが確認できればよい。一方、皮日休に詩を書写された杜牧（杜舍人牧之）は大中六年（八五二）頃に亡くなっており、そうすると杜牧の晩年と皮日休の幼少期が重なるのは間違いないであろう。ここで皮日休が見たという「進士嚴惲に与ふ」詩は、現行の『樊川外集』に収める「嚴惲秀才の落花に和す」詩である可能性が高く、この嚴惲なる人物について杜牧はまた次のような記事を残している。⁽²⁾

會昌五年（八四五）十二月、某、秋浦（池州）より桐廬（睦州）を守らんとし……後四年、吳興（湖州）を守り、因りて進士嚴惲と鬼神の事に言及す。……大中五年（八五二）辛未歲五月二日記す。⁽³⁾

會昌五年十二月、某自秋浦守桐廬……後四年、守吳興、因與進士嚴惲言及鬼神事。……大中五年辛未歲五月二

日記。（『樊川文集』卷九「唐故進士龔軻墓誌」）

これを見ると、嚴惲は杜牧の最晩年期に交流があったことが知られ、前掲の皮日休の序文に引用する杜牧の「進士嚴惲に与ふ」詩が作られたのもこの頃と考えられる。

杜牧の集を見た、その頃、皮日休は地方の襄陽に居た。彼がほぼ時代が重なる杜牧の集を、その中には前述の如くかなり新しい詩も含まれていたのだが、それを見たということから、この時代の情報の伝播の有り様が知られるようで興味深いものがある。しかしここで注目しておきたいのは、彼が〈郷校〉という場所で杜牧の集を書き写していたということである。皮日休が郷校で学んでいたということは、勿論、貢挙を目指してのことであるが、そこで或る人の詩集が作詩の爲の参考文献になっていたという、その学習歴を具体的に語っているのである。郷校とは『唐会要』卷三十五「学校」に記される州学や県学のこと、先に掲げた「元九に与ふるの書」にも言及がある。

又た昨ごろ漢南を過りし日に、適ま主人の衆樂を集め、他賓を娛しましむるに遇ふ。諸妓、僕が來たるを見て、指さして相ひ顧みて曰く、此れは是れ「秦中吟」「長恨歌」の主なりと。長安より江西に抵るまで三四千里、凡そ郷校・佛寺・逆旅・行舟の中、往往にして僕の詩を題する者有り。士庶・僧徒・婦人・處女の口に、毎僕僕の詩を詠ずる者有り。此れ誠に雕蟲の戯にして、多と爲すに足らず。

又昨過漢南日、適遇主人集衆樂、娛他賓。諸妓見僕來、指而相顧曰、此是「秦中吟」「長恨歌」主耳。自長安抵江西三四千里、凡郷校・佛寺・逆旅・行舟之中、往往有題僕詩者。士庶・僧徒・婦人・處女之口、毎毎有詠僕詩者。此誠雕篆之戲、不足爲多。〔『白氏文集』卷二十「與元九書」〕

元和十年（七九五）、都、長安から江州司馬へと左遷された白樂天は道々に彼の詩が書きつけられたり、口ずさまれていたりするのを目の当たりにする。様々な階層の人々に支持されていた白樂天の詩は、ここに記される「秦中吟」や「長恨歌」以外に、彼みずから感傷詩や雜律詩と呼び、或いは世間から元和体と称されるものであったが、具体的に何という詩であったかはそれ以上語っていない。しかしここでもそのような詩が〈郷校〉の壁にも書きつけてあったとは、郷校で学ぶ者たちと詩を結ぶものとして、またそれらが作詩の爲の手本でもあったことを彷彿とさせるようで、至って貴重な記録と成り得ている。⁽⁴⁾

このように貢挙を目指す若者たちが具体的に誰の詩を参考にしたということを語っていないことが、本稿で述べようとする詩格の書の背景を見えにくくしているが、しかし詩文を作るにあたって、その準的となるべきものが切に求められていたことは想像に難くなく、またそれは次の資料からも裏付けられる。貞元十一年（七九五）、韓愈は求職の爲に宰相に奉った書に次のように記している。

而うして方に聞く國家の仕進者、必ず州縣より擧げられ、然る後に禮部吏部に升せられ、之を試みるに繡繪雕

琢の文を以てし、之を考ふるに聲勢の逆順・章句の短長を以てす。其の程式に中たる者、然る後に下士の列に従ふを得。

而方聞國家之仕進者、必舉於州縣、然後升於禮部吏部、試之以繡繪雕琢之文、考之以聲勢之逆順・章句之短長、中其程式者、然後得從下士之列。〔『東雅堂昌黎集註』卷十六「上宰相書」〕

詩文創作の規則に適った〈程式〉は手本を必要とされる。唐の趙璘の『因話錄』は次のように記している。

韓文公と孟東野とは友善たり。韓公の文は至高にして、孟は五言に長じて、時に孟詩・韓筆と號す。元和中、後進は韓公を師匠とし、文體大いに變ず。又た柳州宗元・李尚書翱・皇甫郎中湜・馮詹事定・祭酒楊公・余の座主李公、皆高文を以て諸生の宗とする所と爲り、而して韓・柳・皇甫・李公皆後學を引接するを以て務と爲す。……又た元和より以來、詞翰兼ねて奇なる者、柳州宗元・劉尚書禹錫及び楊公有り。劉・楊二人詞翰の外、別に篇什に精し。又た張司業籍は歌行を善くし、李賀は能く新樂府を爲り、當時歌篇を言ふ者、此の二人を宗とす。李相國程・王僕射起・白少傅居易兄弟・張舍人仲素、場中詞賦の最と爲り、程式を言ふ者、此の五人を宗とす。

韓文公與孟東野友善。韓公文至高、孟長於五言、時號孟詩・韓筆。元和中、後進師匠韓公、文體大變。又柳州宗元・李尚書翱・皇甫郎中湜・馮詹事定・祭酒楊公・余座主李公、皆以高文爲諸生所宗、而韓・柳・皇甫・李公皆以引接後學爲務。……又元和以來、詞翰兼奇者、有柳州宗元・劉尚書禹錫及楊公。劉・楊二人詞翰之外、別精篇什。又張司業籍、善歌行、李賀能爲新樂府、當時言歌篇者、宗此二人。李相國程・王僕射起・白少傅居易兄弟・張舍人仲素、爲場中詞賦之最、言程式者、宗此五人。〔『因話錄』卷三「商部下」〕

ここから元和・長慶年間あたりの様々なジャンルの旗手が手本とされていたことが判るが、特に最後のくだり、

李程を始め五人の詩賦が貢奉の〈程式〉とされたと記しているのは注目される。五代の王定保の『唐摭言』にも賈島について次のようなエピソードを残している。

賈島は程式に善からざれば、毎に自ら一幅を疊みて、舗を巡りて人に告げて曰く、原夫の輩、一聯を乞はんと。

賈島不善程式、每自疊一幅、巡舗告人曰、原夫之輩、乞一聯。〔『唐摭言』卷十二「輕佻」〕

三 中晩唐五代期の詩格の書について

貢奉の試験の為に〈程式〉が必要であることから、受験生たちが実際に有名な作者の詩文を手本としていたことは先の資料に見たが、貢奉という制度は作詩、作文の為の作例指南書までも生み出した。所謂、詩格に関する、一連の書がこれと大いに関わる。ここでいう詩格の書とは、詩に限らず、賦、或いは駢文までも含めた解説書という意味で用いるが、この研究は早くは羅根澤氏などが手掛け、近年は張伯偉氏が『全唐五代詩格校考』を、続けて『全唐五代詩格彙考』を上梓しており、書誌学的研究にも細心の注意を払ったこれらの業績は詩格研究、ひいては中国詩学研究に多大な貢献を成している。⁽⁶⁾ 本論もその成果に拠るものが少なくなく、今、前掲の張氏の書に拠って現存する中晩唐五代期の詩格の書名及びその作者を掲げると次の通りである。

① 『詩議』 皎然（七二〇—七九八？）

② 『詩式』 皎然（七二〇—七九八？）

③ 『金鍼詩格』 又名『金鍼集』 舊題白居易（七七二—八四六）

④ 『文苑詩格』 舊題白居易（七七二—八四六）

⑤『二南密旨』 舊題賈島（七八〇—八四三）

⑥『炙轂子詩格』 王叡（宣宗、僖宗時人）

⑦『緣情手鑑詩格』 李洪宣

⑧『新定詩格』 鄭谷（八五二？—九一〇？）齊己（八六一—九四〇？）・黃損

⑨『風騷旨格』 僧齊己（八六一—九四〇？）

⑩『流類手鑑』 僧虛中

⑪『雅道機要』 徐夔（五代）

⑫『風騷要式』 徐衍（五代）

張氏の前掲の書は更に「全唐五代詩文賦格存目考」を附しているが、それでも実態としては歴代の書目にも載らないものが相当数あったことは疑いない。これら詩格の書が貢舉に強い影響を与えたことは、次の資料から窺い知ることができる。

後唐の明宗の長興元年（九三〇）……十二月、毎年貢舉人の試みらるる所の詩賦多く體式に依らざれば、中書奏請すらく、翰林院に下して、學士に命じ詩賦各の一首を撰ばしめ、貢院に下し以て舉人の模式と爲さんとす。學士院奏すらく、伏して以ふに物を體し情に縁り、文士各の其の工拙を推し、材を掄びて藝を校ぶるに、詞場素より其の規程有り。凡そ策名に務むるには合に常式に遵ふべし。況んや聖君の御宇奥學朝に盈ち、儻令其の規模を明示すとも、或ひは衆の其の臧否を貽さんことを慮る。歷代作者は、範を垂れて相ひ傳へて、將に彼の微瑕を絶えんことを期すれば、未だ其の舊制を擧ぐるに若かず。伏して乞ふに所司に下して、『詩格』『賦樞』に依りて、進士を考試せんことを。

後唐明宗長興元年（九三〇）……十二月、毎年貢舉人所試詩賦多不依體式、中書奏請下翰林院、命學士撰詩賦各一首、下貢院以爲舉人模式。學士院奏、伏以體物緣情、文士各推其工拙、掄材校藝、詞場素有其規程。凡務策名合遵常式。況聖君御宇、興學盛朝、儻令明示其規模、或慮衆貽其臧否。歷代作者、垂範相傳、將期絕彼微瑕、未若舉其舊制。伏乞下所司、依『詩格』『賦樞』考試進士。（『冊府元龜』卷六百四十二「貢舉部・條制第四」）

この資料が語る時代は唐の後の五代（後唐）ではあるが、毎年の貢舉で科される詩や賦が「體式」に依らないため、翰林學士に詩賦を作らせて受験生の「模式」にさせようとしたこと、また『詩格』や『賦樞』に依拠して進士を試験したことなど、当時、如何に規範というものがなければ詩や賦を作ること、またその良し悪しを評価するところが難しかったかを知ることができる。ここに引用する『詩格』の作者が誰であるかは定めがたいが、『賦樞』の作者は、前掲の趙璘の『因話錄』にもその作品が受験生たちによって「程式」と目された、張仲素であろう（『新唐書』卷六十「藝文志・文史類」等）。

以上、詩格の書が貢舉と如何に大きく関わっていたかが知られるのであるが、しかし、はじめから貢舉と歩みを同じくしていたわけではない。例えば、皎然の『詩式』『中序』には、六朝、梁の沈約の『品藻（詩格）』なる書に言及しているが、貢舉の制度に先立って既にこのような書が存在していたのである。そもそもそれは純粹に詩の格律を究めんとする者のために作られたのである。唐の開成三年（八三三）から十年に亘って留学していた、日本の圓仁（慈覺大師）も『開元詩格』一卷（『日本國承和五年入唐求法目錄』）や『詩賦格』一卷（『入唐新求聖教目錄』）を持ち帰ったのも、それらが異国人にとって作詩の爲の貴重な指南書と成り得たからである。また九世紀末に成ったと考えられる、藤原佐世の『日本國見在書目錄』も詩格の書を記録している。いま関連する箇所を掲げると左記の通り。

『詩品』三卷

『詩評』六卷

『文軌』十卷 冷泉院

『筆札華梁』二卷

『文章體』九卷

『文章體例抄』一卷

『文章儀式』一卷

『文章要決』一卷

『文章四聲譜』一卷

『詩筆體』一卷

『文筆要決』一卷 杜正倫撰

『屬體法』一卷

『詩髓腦』一卷

『詩格』三卷

『寶篋』一卷

『大唐文章博士嫌吾文筆病書』一卷

『文音病』一卷

『文章故事』一卷

『八病詩式』一卷

『百屬篇』一卷 樂法臧撰

『文軌抄』六卷

『文諧』廿卷 冷泉院

『文章體例』一卷

『文章體樣』一卷

『文章體論』一卷

『文章釋雜義』一卷

『文章式』一卷

『論體』一卷

『文筆式』二卷

『四聲八牀』一卷

『注詩髓腦』一卷

『詩病體』一卷

『文筆範』一卷 王孝則

『詩八病』一卷

『文章始』三卷 冷泉院

『詩體』七卷

『讀異牀諸詩法』一卷

『文場秀句』一卷

『古今詩類』二卷

『文儀集注』一卷

『唐朝新定詩體』一卷

『五格四聲』一卷

『聖證論』十一卷

『累玉記』一卷

ここで注目すべきは、詩格の書が「小學家」に並べられていることである。この目録の分類は小長谷恵吉氏の『日本国見在書目録解説稿』に拠ると、概ね『隋書』『經籍志』を踏襲しているという⁶⁾。この經部小学類には、例えば、許慎の『説文解字』のような字書や、劉善経の『四聲指歸』のような声韻に関するものも属しているが、『日本国見在書目録』『小學家』にはそういった書の後に、このように詩格の書も並べられているのである。これより先、九世紀初めに成った、空海の『文鏡秘府論』も王昌齡の『詩格』や皎然の『詩議』などと共に、『調四聲譜』や劉善経の『四聲指歸』といったものも引用している。ところが時代が降って『新唐書』や『宋史』では詩格の書は經部小学類ではなく、集部文史類に置かれるようになる。分類の差異は詩格に対する解釈の差異である。『日本国見在書目録』で詩格の書を「小學家」に置いているのは、この目録の分類自体が、中国のもの（『隋書』『經籍志』）をほぼ踏襲しているのであれば、詩格の書をこのように分類する、より具体的な拠り所と成り得るものがやはり中国に有ったと考えるのも不思議ではない。そして『文鏡秘府論』『日本国見在書目録』より後に、詩格の書に対する見方に大きな変化が起こったというふうに推測されるのである。羅根澤氏はその著『中國文學批評史』の中に「詩格」という章を設け、詩格の隆盛が初盛唐と、晩唐五代から宋代の初めの二つの時期に在ったことを論証している。⁹⁾張伯偉氏もそれを認めた上で初盛唐の詩格が詩病や對句中心になっているが、それはちょうど律詩の形成・完成時期であり、また貢拳と関係があるからとし、晩唐五代については多くの詩僧たちが中唐の皎然の『詩式』の影響を受け、形式的には〈入門〉を發明し、理論的には〈體勢（張力）〉と〈物象（意・象の融）〉を深化させていった

ことを論証しているように、詩格について形式的修辭的なものから詩歌理論的なものへとその関心が移っていったことが知れる⁴⁴。これと前述の詩格の書の種類の変化とが軌を一にしていると見ることが出来る。この詩格の理論的な問題については更なる研究が待たれるが、そもそも晩唐五代の詩格の隆盛を支えたものは一体何であったのか。

『唐詩記事』の「段成式」の項には次のような記事を載せている。

『酉陽雜俎』に云へり（中略）因りて説ふ、故牛相公（僧孺 八四八歿）揚州にて秀才、蒯季逸の詩のへ蟾蜍は醉裏に破れ、蛺蝶は夢中に残るゝと云ふを賞し、毎坐之を吟ずと。予因りて坐客に請ひて各の近日の詩を爲る者の佳句を吟ぜしむれば、

賈島のへ舊國別れて多日、故人に少年無しゝを吟ずる有り。（『全唐詩』卷五百七十二「旅遊」）。

馬戴はへ猿は洞庭の樹に啼く、人は木蘭の舟に在りゝと。（同書卷五百五十五「楚江懷古三首」其二）。

又たへ骨消多て金鏃在りゝと。（同書卷五百五十五「塞下曲二首」其二）。

僧無可のへ河來りて塞に當たりて斷たれ、山遠くして沙と平かなりゝを吟ずる有り。

（同書卷八百十三「送李騎曹之武寧」※同書卷二百四十八 郎士元「送李騎曹之靈武寧侍」）。

又たへ門を開けば落葉深しゝと。（同書卷八百十三「秋寄從兄賈島」）。

張祜のへ河流側に關に讓るゝを吟ずる有り。（同書卷十八「入關」※同書卷五百十「入潼關」）。

又たへ泉聲は池に到りて盡くゝと。（同書卷五百十「題惠山寺」）。

僧靈準の詩へ晴に看る漢水の廣きを、秋に覺ゆ峴山の高きをゝを吟ずる有り。

朱景元のへ塞鴻は秋に先んじて去り、邊草は夏に入りて生ずゝを吟ずる有り。

余は上都の僧元礎のへ寺は隔たりて殘潮去るゝを吟ず。

又たへ藥を采りて泉聲を過る」と。

又たへ林塘秋半の宿、風雨夜深くして來る」と。

余は蜀中の客龐季子を識りて、毎にへ寒雲生じて滿ち易く、秋草長ずるも高くなり難しを云ふ。

『西陽雜俎』云（中略）因說故牛相公揚州賞秀才蒯季逸詩云へ蟾蜍醉裏破、蛺蝶夢中殘、每坐吟之。予因請坐客各吟近日爲詩者佳句、有吟賈島へ舊國別多日、故人無少年。馬戴へ猿啼洞庭樹、人在木蘭舟、又へ骨消金鏃在。有吟僧無可へ河來當塞斷、山遠與沙平、又へ開門落葉深。有吟張祐へ河流側讓關、又へ泉聲到池盡。有吟僧靈準詩へ晴看漢水廣、秋覺峴山高。有吟朱景元へ塞鴻先秋去、邊草入夏生。余吟上都僧元礎へ寺隔殘潮去、又へ采藥過泉聲、又へ林塘秋半宿、風雨夜深來。余識蜀中客龐季子、每云へ寒雲生易滿、秋草長難高。〔『唐詩記事』卷五十七「段成式」〕

ここに引く段成式（八六三歿）の『西陽雜俎』の記事は現行本には見えないが、この記事の省略した部分は南宋、曾慥の『類説』卷六にも『廬陵官下記』「句枝」として類似の文を載せている。¹⁰²

予、坐客の聯句の互ひに送るを以て煩と爲し、乃ち細き斑竹を取りて、白金を以て首に絡めること茶莢の如くし、以て遞ひに聯句を送れば、之を句枝と謂ふ。或ひは惡韻を押むを角ひ、或ひは盃茶を煎て八韻の詩を爲り、皆之を雜連と謂ふ。若し不朽なるを志せば則ち客を汰び穩韻を揀び、得る所無ければ輒ち已み、之を苦連と謂ふ。句句共に平聲の好韻にして僻ならざる者を押み、竹簡に書し、之を牒と謂ふ。

予以坐客聯句互送爲煩、乃取細斑竹、以白金絡首如茶莢、以遞送聯句、謂之句枝。或角押惡韻、或煎盃茶爲八韻詩、皆謂之雜連。若志於不朽、則汰客揀穩韻、無所得輒已、謂之苦連。句句共押平聲好韻不僻者、書於竹簡、謂之牒。

書名にいう〈廬陵〉とは吉州の治所で、段成式は大中元年（八四七）から同七年（八五三）までその刺史として赴任していた。また先の『唐詩記事』に牛僧孺を「故牛相公」と記してあれば、この話は更に大中二年（八四八）から同七年（八五三）までの事と限定できる。この話から段成式が日常的に坐客と共に聯句を作っていた様子がありありと伝わってくる。聯句をいちいち遣り取りするのが面倒なので、句を書きつけた竹を繋いだようなもの（句枝）も考案したり、また坐客とややこしい韻（惡韻）で挑んだり、お茶を煎る間に八韻の詩を完成したりもした（雜連）。また不朽の名句をと思えば、それは先ず相手と穩当な韻（穩韻）から選ばなければならないが、句が思い浮かばなければそれまでとしたのである（苦連）。平声のほどよい韻（平声好韻）を踏んでいれば、それを書き残しもした（牒）。これは当時の聯句の有り様を知る上で恰好の材料を提供している。しかしまた別の角度からこれを見れば、本論で問題にしている詩格とも密接に関係する。〈惡韻〉〈穩韻〉〈平声好韻〉といったものは押韻について言っており、〈雜連〉〈苦連〉〈牒〉になると形式論や創作論に関わる事である。つまりこれは何も聯句に限ったことではなく、大きく詩の形式論・格律論・創作論の範疇に入るものであり、詩格の書の中で論じられても決して不思議ではない内容である。段成式は〈苦連〉について〈若し不朽なるを志せば則ち客を汰び穩韻を揀び、得る所無ければ輒ち已む〉というが、これは例えば、王昌齡の『詩格』（空海『文鏡秘府論』南卷引）の〈夫れ文章を作るには、但だ多く意を立つ。左に穿ち右に穴ほりて、心を苦しめ智を竭くしさしめ、必ず須らく身を忘れて、拘束すべからず。思ひ若し來たらざれば、即ち須らく情を放にして却て之を寛にし、境を生ぜしむべし。然る後境を以て之を照らせば、思ひ則ち便ち來り、來れば即ち文を作る。如し其の境思來たらざれば、作るべからざるなり〉というのにも通ずる創作論である。

更にこの資料で押さえておかねばならないのは、当時、坐客と一緒に場を楽しんでいたということであり、その

楽しみの一つが聯句だったということである。坐客と場を楽しむことについては、同じく段成式の『酉陽雜俎』には次のようにも記している。

成式曾て一夕堂中に會し、時に妓女の玉壺は魚炙を忌みて、之を見て色動ぜり。因りて諸妓の惡む所の者を訪ぬれば、蓬山は鼠を忌み、金子は蝨を忌むこと尤も甚しきこと有り。坐客乃ち蝨を微り鼠を拏るの事を競へば、多きこと百餘條に至る。予戯れに其の事を摭ひて『破蝨錄』を作る。

成式曾一夕堂中會、時妓女玉壺忌魚炙、見之色動。因訪諸妓所惡者、有蓬山忌鼠、金子忌蝨尤甚。坐客乃競微蝨拏鼠事、多至百餘條。予戲撫其事作『破蝨錄』。(『酉陽雜俎』卷十二「語資」)

鼠や鼠といった話題で盛り上がる、そのような場で聯句も作られていたのである。もっとも聯句を詠む規模の大きさと知名度で言えば、既に中唐の大暦年間に鮑防らの浙東詩人群や顔真卿や皎然らの浙西詩人群らが有る。そこではいろいろな形式で聯句を詠み、また面白い趣向が凝らされていた。彼等よりも先の孟浩然は「寒夜張明府宅宴」詩(『全唐詩』卷一百六十)で「筵列邀酒伴、刻燭限詩成(筵を列ねて酒伴を邀へ、燭に刻み限りて詩成る)」と詠んだが、顔真卿も「水堂送諸文士戲贈潘丞聯句」詩で「詩教刻燭賦、酒任連盤酌(詩は燭に刻みて賦せしめ、酒は盤を連ねて酌むに任す)」(『全唐詩』卷七百八十八)と詠み、聯句でもそのような趣向が凝らされていたことが知られる。このような詩会は段成式が記すように晩唐に至っても脈々と続いていたのである。その坐客が誰であったかは段成式は記していないが、歴史に名を留めることがなかった、このような人々の存在が中国の文学史を考える上で決して無視できないものがある。先の『唐詩記事』が引く『酉陽雜俎』の後半部分で、段成式が「予因請坐客各吟近日爲詩者佳句」と言ったのに応えて、坐客は好みの句を推賞した。その中で賈島・馬戴・張祜・無可は有名な詩人であるが、靈準については、かつがつ賈島に「靈準上人院」詩(『全唐詩』卷五百七十三)が有るが、元楚や龐季子に至っ

ではその伝記も不明で、彼等三人の詩も『全唐詩』がこの『唐詩紀事』に拠って逸句扱いとしている以外、何も残っていない。ここにも無名の詩人たちが登場している。しかしこれらの詩人が所謂、有名無名かは、ひとえに今日までに伝わっている資料に懸かっている。つまり今日的事実は必ずしも当時の事実であったとは限らないことに注意せねばならない。

このような事象は実は詩格の書にも見られる。例えば、皎然の『詩議』及び『詩式』以後の、つまり九世紀以降の中晩唐五代の詩格の書で引用詩句の有る八種について調べてみると、次の通りである。

『金鍼詩格』全五首、作者不明〇首

『文苑詩格』全二十七首、作者不明七首

『二南密旨』全二十七首、作者不明二首

『炙轂子詩格』全二十四首、作者不明三首

『緣情手鑑詩格』全三首、作者不明一首

『新定詩格』引用詩無し

『風騷旨格』全一〇五首、作者不明三十六首

『流類手鑑』全二十三首、作者不明〇首

『雅道機要』全一〇七首、作者不明三十六首

『風騷要式』全二十五首、作者不明〇首

※作者不明には『毛詩』や「古詩」の作者は含まない

この中で『金鍼詩格』『流類手鑑』『風騷要式』がすべて作者を明示しているが、残りは作者不明のものや詩題だけのものなど、その書式は一定していない。また同じ書の中でもその書式はばらばらである。例えば王叡の『炙

韞子詩格』にそれを見てみると次の通りである。

① 律に背くの體

「柳を詠む」詩へ日は落ち水流れて西復た東、春光盡きず柳何ぞ窮まる。巫娥廟の裏は低く雨を含み、宋玉の宅前は斜めに風を帶ぶ。此の後の第五句と第二字は合に側聲を用ひ帶び起こすべきも、却って平聲を用ふれば、是れ律に背くなり。へ榆莢を將って共に翠を爭はせず、深く杏花の紅に相ひ映ゆるを感ず。此れは是れ大才の常格に拘らざるの體なり。

② 訐調の體

李鄴の詩へ青蛇竹に上りて一種の色、黃蝶溪を隔てて無限の情。此のへ種の字は合に平を用ふべきも側を用ふれば、是れ訐調なり。

③ 景象を模寫し含蓄あるの體

詩に云へりへ一點の孤燈に人夢覺め、萬重の寒葉に雨聲多し。此の二句は燈雨の景象を模寫し、悽慘の情を含み蓄ふ。

④ 兩句一意の體

詩に云へりへ如何ぞ百年の内、一人の閑なるも見ず。此の二句は屬對と雖も、十字血脈相ひ連なる。

① 背律體

「詠柳」詩へ日落水流西復東、春光不盡柳何窮。巫娥廟裏低含雨、宋玉宅前斜帶風。此後第五句第二字合用側聲帶起、却用平聲、是背律也。へ不將榆莢共爭翠、深感杏花相映紅。此は大才不拘常格之體。

② 訐調體

李郢詩〈青蛇上竹一種色、黃蝶隔溪無限情〉。此〈種〉字合用平而用側、是評調也。

③模寫景象含蓄體

詩云〈一點孤燈人夢覺、萬重寒葉雨聲多〉。此二句模寫燈雨之景象、含蓄悽慘之情。

④兩句一意體

詩云〈如何百年內、不見一人閑〉。此二句雖屬對、十字血脈相連。

①の「詠柳」詩は作者が杜牧であるから、〈大才〉という呼称を用いられ、格律に反することが許されるのである。②の李郢の詩は「湫河館（一作暮春山行田家歇馬）」で、本書の「雙關體」の処では〈李郢〉を〈李端公〉と記す。③の詩は作者・詩題とも不明。④の詩は戴叔倫の「別友人」詩。

これらの例からも判るように、その書式には一貫性がない。もっとも『縁情手鑑詩格』や『新定詩格』など原形を留めていないと思われるものがあり、前掲の統計の数字に完全に依りかかることはできない。また張伯偉氏は「摘句論」と題する論文で〈詩話〉の中の多くの引用詩句の批評について、往々にしてその詩句の作者や詩題を注記していないものがあるが、その詩句の音・意象・リズム・句法・韻律・叙述技法などを分析する上での妨げにはならないと述べている。¹⁰⁸これは〈詩話〉についての指摘であるが、詩格の書の引用詩句についても同様の見方が成り立つであろう。しかしここにこのように作者を明示しているものと、作者不明のものとが混在している事象の存在する理由そのものを更に掘り下げてみる価値はある。何故ならばこれは先述の段成式たちが所謂、有名無名の詩人たちの句を推賞している事象とも通底していると考えからである。

四 唐人選唐詩との関わりについて

先で詩格の書及び段成式の聯句に関する記事について見てきたが、これと比べてみたいのが唐人選唐詩である。なぜならこれもまた唐代に編まれたものであり、これと比較することによって、この詩格の書の時代性及びその特徴を再確認できるのではないかと期待されるからである。そもそも前掲の『因話録』の中でも貢舉の「程式」と目された五人の中の一人、王起は『文場秀句』なる書を作っているが、これを『新唐書』は「總集類」（卷六十「藝文志」）に分類している。しかし先の『日本國見在書目錄』の「小學家」に詩格の書に混じって同名の書が並べられているのが見える⁴⁹。このように時として詩格の書と唐人選唐詩の境界が不鮮明になることがあるということに、両者の間に或る共通項が有ることを示唆している。

唐人選唐詩については『唐人選唐詩十種』、更にそれを基礎にして編纂された、傳璇琮主編『唐人選唐詩新編』に依るところが多いが、これら唐人選唐詩の中で中晩唐五代期に限ったものを掲げると次の如くである⁵⁰。

- ①『中興間氣集』三卷 高仲武
- ②『御覽詩』一卷 令狐楚（七六六―八三七）
- ③『極玄集』二卷 姚合（七七五―八五五？）
- ④『又玄集』三卷 韋莊（八三六―九一〇）
- ⑤『才調集』十卷 韋穀

ここに掲げたものは僅か五種にしか過ぎない。陳尚君氏も「唐人編選詩歌總集敍録」の「二 斷代詩選（唐人選唐詩）」に於いて四十七種もの選集について分析を行っているが、いずれにせよ、今日、我々が目にできるものは

当時存在していたものに比べて、量的にも内容的にも圧倒的に不足している。それでも僅かに残されたものから、当時を窺うことは可能である。ここに掲げた資料について必要な説明を加えると、貞元年間（七八五—八〇五）の後半に成ったとされる、高仲武の『中興間氣集』について、今は伝わらない『唐詩類選』二十巻を編纂した、晩唐の顧陶が大中十年（八五六）に書いた序文に次のように記されている。

前賢の纂録は少なからずと雖も、途を殊にして歸するところ同じ。『英靈』『間氣』『正聲』『南薰』の類は、朗照の下、予遺有ること罕にして、取捨の時に、能く少誤も無し。

雖前賢纂録不少、殊途同歸。『英靈』『間氣』『正聲』『南薰』之類、朗照之下、罕有予遺、而取捨之時、能無少誤。（『文苑英華』卷七百十四、顧陶「唐詩類選序」）

ここでは『中興間氣集』を殷璠の『河嶽英靈集』、孫翌の『正聲集』、竇常の『南薰集』と併記して、それらの選詩が正鵠を射ていると評価している。

しかし更に時代は下って、鄭谷（八五二？—九一〇？）は『河嶽英靈集』と比較して次のように詠んでいる。

殷璠裁鑒英靈集 殷璠裁鑒英靈集

頗覺同才得旨深 頗る覺ゆ同才の旨深きを得るを

何事後來高仲武 何事ぞ後來高仲武

品題間氣未公心 間氣に品題して未だ公心ならず（『全唐詩』卷六百七十五「讀前集二首」其一）

鄭谷の『中興間氣集』に対する評価は厳しいが、いずれにせよ、これらの資料で押さえておきたいのは、この集が唐末に至ってもなお注意されていたという事実である。もっとも高仲武自身も、その「唐中興間氣集序」で歴代の選集に言及しており、唐代のものでは孫翌の『正聲集』・崔融の『珠英學士集』・殷璠の『丹陽集』を挙げて、そ

れらへの対抗意識を露わにしている。

梁の昭明の載述より已往、撰集者數家にして、其の風流を権するに、『正聲』最も備はれり。其餘の著録、或ひは未だ至らず。何となれば、『英華』（梁、昭明太子『古今詩苑英華』）は浮游に失し、『玉臺』（梁、徐陵『玉臺新詠』）は淫靡に陥り、『珠英』は但だ朝士を紀し、『丹陽』は止だ吳人を録するのみ。

梁昭明載述已往、撰集者數家、権其風流、『正聲』最備。其餘著録、或未至焉。何者、『英華』失於浮游、『玉臺』陷於淫靡、『珠英』但紀朝士、『丹陽』止録吳人。

『御覽詩』は元和十二年（八一七）頃、翰林學士、令狐楚が憲宗の命を受けて編纂したものである。

『極玄集』については唐末の光化三年（九〇〇）の年記の有る、韋莊の「又玄集序」には次のように記している。

昔姚合『極玄集』一卷を撰び、當代に傳へて、已に精微を盡くすも、今更に其の玄なる者を採りて、勒して『又玄集』三卷と成す。

昔姚合撰『極玄集』一卷、傳於當代、已盡精微、今更採其玄者、勒成『又玄集』三卷。

また韋穀の『才調集』も『又玄集』から取られたものが多いことは、前掲の『唐人選唐詩新編』『才調集』の「前記」でも指摘する通りである。

これらのことから少なくとも現存する唐人選唐詩に限ってみれば、『御覽詩』を除いていずれもそれらに先んずる選集を意識していることが知れる。それはまた自らの集も後世の読者を意識しているということでもある。

いま、これら唐人選唐詩の引用詩と前掲の詩格の書のそれとの重複情況を見てみると表の通りである。（※「作者不明」には『毛詩』や「古詩」の作者は含まない。『新定詩格』は引用詩が無いので省略）

これは数字上の分類だが、例えば、『文苑詩格』が引用する二十七首の内、はっきりと唐詩と判るのは全部で九

	金 鍼 詩 格	文 苑 詩 格	二 南 密 旨	炙 戟 詩 格	緣 情 手 鑑	風 騷 旨 格	流 類 手 鑑	雅 道 機 要	風 騷 要 式
詩格引詩総数	5 首	27 首	27 首	24 首	3 首	105 首	23 首	107 首	25 首
作者不明詩数	0 首	7 首	2 首	3 首	1 首	36 首	0 首	36 首	0 首
唐 詩 引 用 数	3 首	9 首	8 首	12 首	2 首	69 首	21 首	65 首	23 首
唐人選唐詩引 用詩数(延数)	1 首 (2)	3 首 (6)	5 首 (7)	5 首 (9)	1 首 (1)	9 首 (11)	3 首 (3)	7 首 (8)	4 首 (6)
中興間氣集	0	2	1	1	0	1	0	1	0
御 覽 詩	0	0	0	0	0	0	0	0	0
極 玄 集	0	2	5	1	0	1	0	1	0
又 玄 集	1	1	1	3	0	3	3	3	3
才 調 集	1	1	0	4	1	6	0	5	3

首である。その内、皎然の「題廢寺」が『極玄集』卷下に、劉長卿の「別嚴士元」が『中興間氣集』卷下及び『才調集』卷八に、戴叔倫の「別友人」が『中興間氣集』卷上・『極玄集』卷下・『又玄集』卷上にというふうに唐人選唐詩に三首、延べ六例採録されている。また『風騷旨格』は唐代の詩人の引用が六十九首と際立って多いが、実はその内の半数に近い三十一例がこの書の作者である齊己自身のもので、『雅道機要』も二十首が齊己の詩である。このように唐人選唐詩と詩格の書との間には驚くほどの重複が見て取れるわけではないが、この重複状況からも時代を反映していることは窺い知ることができる。また大暦・貞元年間の詩を集めた『御覽詩』も詩格の書に引用されてもよさそうであるが、一首も取られていない。これは『御覽詩』が当時も引き合いに出されず、後世、酷評されていることと無関係ではなく、それがここに如実に表われていると考えられる。更には『中興間氣集』卷下「孟雲卿」の小序で高仲武は次のように記している。

沈・陳に效ふと雖も、纔かに堂に升るを得るのみにして、猶ほ未だ室に入らず。然れども当今の古調は、其の右に出

づるもの無く、一時の英なり。余、孟君の古を好むに感じ、『格律異門論』及び譜三篇を著し、以て其の體統を攝らんとす。

雖效於沈・陳、纔得升堂、猶未入室。然當今古調、無出其右、一時之英也。余感孟君好古、著『格律異門論』及譜三篇、以攝其體統焉。

先の鄭谷の詩にもこの『中興間氣集』が〈品題〉するものであったというように、小序のこのような内容は詩格の書との類似性を指摘できるし、更にはここにいう〈格律異門論〉及譜三篇がもし詩格に關係するものであれば、唐人選唐詩と詩格を結びつけるものとして有力な傍証に成り得よう。また前掲の『文場秀句』を作った王起は『大中新行詩格』（『新唐書』卷六十「藝文志」「文史類」等）なる書も作っているし、『極玄集』を編纂した姚合にも『詩例』一卷（『新唐書』卷六十「藝文志」「文史類」等）が有る。これらはいずれも唐人選唐詩と詩格の書とに密接な関わりが有ることを物語っている。『風騷旨格』を作った齊己も皎然とこの姚合とを並べて次のように詠んでいる。

晝公評衆製 晝公（皎然）は衆製を評し

姚監選諸文 姚監（姚合）は諸文を選ぶ（『全唐詩』卷八百四十一「寄南徐劉員外二首」其二）

このように皎然が『詩議』や『詩式』という詩格の書で詩を〈評〉し、また姚合が『極玄集』で詩を〈選〉んだことは両者に通底するものがあることを認めているのである。

しかし、かといってこの両者がまったく同じように扱われるものでもない。唐人選唐詩は詩格の書で引用される詩の掲げ方と異なり、全篇を掲げて、詩題及び作者を明示している。これは一見、当然のようであるが、実はそこにはより幅広い読者を意識しつつ編纂されたのではないかと思われるふしがある。例えば、『御覽詩』所収の于鵠の「送客遊邊」詩には〈原題「送張司直入單于」〉という按語が附されているように、『全唐詩』では「送張司直

入單于（一作送客遊邊）」（卷三百十）に作り、『文苑英華』では「送張司直往單于」（卷二百九十九「邊塞」）と作っている。しかし『又玄集』巻中では『御覽詩』と同様に「送客遊邊」に作っているのである。また『御覽詩』所収の李宜遠の「塞下作」詩は『文苑英華』では「并州路作」（卷二百九十三「行邁五」）に作り、『全唐詩』巻四百六十六も同じである。しかしその『全唐詩』の注にも記すように、同書巻七百七十六ではこの詩を楊達の「塞下曲」と作っているが、『又玄集』巻上及び『才調集』巻七は、『御覽詩』と同じく李宜遠の「塞下作」としている。このように一つの詩に複数の詩題が存在することについて、『御覽詩』など唐人選唐詩のテキストそのものにも問題が存在するように単純に言い切れないものがあるが、それにしても『文苑英華』や『全唐詩』のように『御覽詩』や『又玄集』よりも成書年代の新しいものが作詩の情況が具体的な詩題（「送張司直往單于」「并州路作」）になっており、『御覽詩』や『又玄集』といった成書年代のより古いものが、一般的な詩題（「送客遊邊」「塞下作」）であることは、ひとつの傾向として押さえることができるのではないだろうか。つまり唐人選唐詩は他の詩文選集が正確な詩題と詩句を網羅的に蒐集することを主たる目的とするものとは異なっているという見方も成り立つのかもしれない。特定の情況の下で、作者の至って個人的な体験によって産み出された詩を詩人個人のものから引き離して、主題を極度に限定させない詩題にすることによって、幅広く多様な読者の共感を得やすくし、更には作詩の参考に供しやすくする意図が有ったと言えるのではないだろうか。これを以てより幅広い読者を意識していたという傍証とすることも不可能ではないであろう。

一方、詩格の書は必ずしもそのようにはなっていない。つまり一口に詩格の書と言ってもそこには色々なものがある。虚中の『流類手鑑』のように詩題は掲げないが、作者名はすべて明示するというものもあるが、現存のものは前掲の王叡の『炙轂子詩格』のように引用詩の掲げ方が不揃いであるものの方が多い。これは何を意味している

かというところ、唐人選唐詩と異なっていて、必ずしも不特定多数の読者を想定していなかったからではないだろうか。前掲の段成式の聯句の記事の如く、鼂負の詩句を推賞したのは坐客との交歓の場であった。詩格の書もその大多数は限られた場で論じられたものをまとめた札記のようなものだったのではないだろうか。そうするとそれらの作者が〈舊題〉とされて不明確であるのは言うに及ばず、作者が明らかにされているものも、或いは本人の手を経たものではなく、周囲の者が書き留めたという可能性も有り得るであろう。今日、伝わっている詩格の書の殆どが完全ではないのもこの辺りに起因しているからではないだろうか。つまり詩格の書を支えていた人たちの存在をここに見るのである。

五 おわりに

これまで詩格の書を段成式の聯句に関する資料などと重ねて、このような書物が成立するその背景には貢挙の受験生だけではない支持者層が存在していたことを述べてきた。ここで詩格の書と聯句との関係について附言するならば、『詩議』や『詩式』を書いた皎然も様々な形式で聯句創作を試みている。それは両者に文学の可能性の追求という点に於いて通底するものが有ったからで、段成式も皎然ほどの創造力と能力は望むべくもないが、「寺塔記上」に収める二十首の聯句、「遊長安諸寺聯句」（『西陽雜俎續集』卷五・卷六）に於いて多彩な聯句を詠んでおれば、いわゆる詩格に対する興味の程が十分に窺い知れよう。本稿では更に詩格の書を唐人選唐詩と比較して、その引詩の重複情況などから両者の関連性を指摘し、それらが時代を反映していることを明らかにした。詩格の書が唐人選唐詩と異なるのはそれが表舞台に上がることが困難であったことにあるが、これは決して否定的に捉えることでもない。むしろこのような詩格の書が伏流水となって、後世の詩話に見える評詩へと繋がっていくという、積極的な

評価をせねばならない。そもそも坐客に関する記事として引用した『唐詩記事』所引の『酉陽雜俎』や『類說』所收の『廬陵官下記』がそれぞれ子部小説家及び子部雜家に分類されていることは、後世の詩話が子部小説家に分類されることがあることとも関係している。

以上要するに、詩格から詩話へと繋げる役割を担ったのは、前掲の無名の坐客たちであり、彼等に推賞された有名無名の詩人たちであった。彼の坐客たちが推賞した詩について補足するならば、賈島の「旅遊」詩は、晩唐の張爲（八五八進士？）も『詩人主客圖』『清奇雅正』でこの一聯を選んでおり、宋の惠洪の『冷齋夜話』卷五「蘇王警句」にも次のように記している。

唐詩に「長く人を送る處に因れば、憶ひ得たり家を別るる時を」と曰へる有り。又た曰く「舊國別れて多日、故人に少年無し」と。荆公其意を用ひて古今人の道ふを経ざる語を作る。

唐詩有曰「長因送人處、憶得別家時」。又曰「舊國別多日、故人無少年」。荆公用其意、作古今不經人道語。

馬戴の「楚江懷古」詩も『詩人主客圖』『清奇雅正』及び『又玄集』卷下に引用され、無可の「秋寄從兄賈島」詩は『流類手鑑』『學詩類例』に「比不招賢士」と解かれ、『冷齋夜話』卷六「象外句」には次のように言う。

唐僧に佳句多く、其の句法を琢き物に比するに意を以てし某物を指言せざるを、之を象外の句と謂ひ、無可上人の詩の「雨を聽けば寒さ更に盡き、門を開けば落葉深し」と曰ふが如きは、是れ落葉を以て雨聲に比するり。

唐僧多佳句、其琢句法比物以意而不指言某物、謂之象外句、如無可上人詩曰、聽雨寒更盡、開門落葉深、是以落葉比雨聲也。

張祐の「入關」詩は唐末の范攄の『雲谿友議』卷中「錢塘論」に、解元を巡って徐凝に競い負けた張祐が白樂天

に自らの詩を誇るくだりで引用されている。

遂に「長劒倚天外」賦・「餘霞散成綺」詩を試みらる。試訖りて解送するに擬を以て元と爲し、祐は其の次なり。張曰く、祐の詩に「地勢遙かに岳を尊び、河流側らに關に讓る」有り。多士以らく陳後主の「日月は天徳を光かし、山河は帝居を壯とす」は此れ徒に前名有りと。……

遂に「長劒倚天外」賦・「餘霞散成綺」詩。試訖解送以擬爲元、祐其次耳。張曰、祐詩有「地勢遙尊岳、河流側讓關」。多士以陳後主「日月光天徳、山河壯帝居」此徒有前名矣。……

また「題惠山寺」詩を宋の胡仔の『漁隱叢話前集』卷三十六には次のように記す。

『西清詩話』に云へり、『百家詩選』余之を讀み、其れ張祐の「惠山寺」詩の「泉聲池に到りて盡き、山色樓に上りて多し」を取りて「孤山寺詩」の「樓臺碧岑に聳多、一徑湖心に入る。雨ふらずして山長く潤ひ、雲無くして水自ら陰。斷橋に荒蘚澁たりて、空院に落花深し。猶ほ憶ふ西窓の月、鐘聲北林に在り」を取らざるを見る。（中略）意果して如何なるかを知らず。

『西清詩話』云、『百家詩選』余讀之、見其取張祐「惠山寺」詩「泉聲到池盡、山色上樓多」而不取「孤山寺詩」「樓臺聳碧岑、一徑入湖心。不雨山長潤、無雲水自陰。斷橋荒蘚澁、空院落花深。猶憶西窓月、鐘聲在北林」。（中略）不知意果如何耳。

このように無名の坐客たちが推賞した詩が後の詩句圖・詩格・詩話などにも供せられているということは注目される。

同様にこれを詩格の書に求めると、『炙轂子詩格』の「三韻體」に李益の「塞下曲」を引いているが、『滄浪詩話』「詩體」（『詩人玉屑』卷二）に「有律詩止三韻者」としてこれを引用している。

李洪宣の『縁情手鑑詩格』『審對法』には方千の「旅次揚州寓居郝氏林亭」詩の〈鶴盤遠勢投孤嶼、蟬曳殘聲過別枝（鶴は遠勢に盤して孤嶼に投じ、蟬は殘聲を曳きて別枝を過る）〉を引いているが、『詩話總龜』卷十一「雅什門下」には、後蜀の何光遠の『鑑戒錄』を引いて〈方千詩を爲るに句を練りて、字字功有り、人云へり、《鶴盤遠勢投孤嶼、蟬曳殘聲過別枝》〉といい、『詩人玉屑』卷三「唐人句法」「詠物」にこの一聯を引き、『能改齋漫錄』卷八「沿襲」にも「山蟬帶響穿疎戸」を〈前輩は蘇子美の詩の《山蟬帶響穿疎戸、野蔓延青入破窗（山蟬響を帯びて疎戸を穿ち、野蔓青を延ばして破窗に入る）》を稱ふるも、蓋し唐の方千の詩の《鶴盤遠勢投孤嶼、蟬曳殘聲過別枝》に出づ〉という。

また齊己の『風騷旨格』『詩有六義（三目比）』に、杜牧の「鶴」詩の〈丹頂西施の頰、霜毛四皓の鬚〉を引いているが、『詩人玉屑』卷十に陳巖肖の『庚溪詩話』を引いて〈鶴を詠むが如きは《低頭乍恐丹砂落、斂翅常疑白雪鎖（頭を低くせば乍ち恐る丹砂の落つるを、翅を斂むれば常に疑ふ白雪の鎖すかと）》と云ふは、此れ白樂天の詩なり。《丹頂西施頰、霜毛四皓鬚》は此れ杜牧之の詩にして、皆格卑くして遠韻無きなり〉と見える。

これらの例からも、唐代の詩格の書が後世の詩話と関係があることが証せられるが、この詩格の書が初学者や貢挙の受験者だけを対象に編まれていたとすれば、これを後の詩話へと繋げることは甚だ困難であろう。これは経部小学類に分類されていた詩格の書が『新唐書』や『宋史』になって集部文史類に分類されたことに象徴的に見て取れるように、作詩の爲の参考書を求める初学者や貢挙の受験者だけではない、そこには詩を論じるに足りる人々たちの存在のあったことを考えねばならないのである。そもそも貢挙に関連して、格が云々されるのは当然である。

『唐摭言』卷十「韋莊奏請追贈不及第人近代者」では、方千について〈幼くして清才有りて、徐凝の器とする所と爲り、之に格律を誨ふ〉と記している。これは徐凝が貢挙を目指す幼い方千に作詩の手ほどきをしたことをいう

が、一方、この貢挙とは無縁の人々の詩文について格が云々されることがある。睦州刺史の任にあった四十四歳の杜牧は「刑部崔尚書に上るの狀」(『樊川文集』卷十六)の冒頭、〈某、流輩に比して、疎濶慵怠にして趨嚮するところを知らずして、唯だ書を讀むを好むも忘れること多く、文を爲りては格卑し〉と謙辞ではあるが、自分の文の評価に〈格〉を使用している。また『唐摭言』卷十「海叙不遇」にも〈閔廷言は豫章の人なり。文格高絶にして、咸通中、初め來鵠と名を齊しくす〉とあり、また同卷〈周賀少くして浮圖に従ひ、法名は清塞、姚合に遇ひて初に反る。詩格清雅にして、賈長江・無可上人と名を齊しくす〉とある。このように詩文の格が云々されるのはそんなに古くはないようで、これも詩格の発展と関連する事象として注目されるが、前述の如く、詩格に対する関心が既に貢挙を受験する者たちだけに止まるものではなかったということをも裏付ける有力な証左と成り得よう。

註

- (1) 二〇〇〇年十一月十一日、京都女子大学で開催された東山之會で川合康三氏は「中國の恋愛文学について」と題する研究発表で、中国古典文学に欠如しているテーマは「恋愛文学」とともに「児童文学」が挙げられることを指摘している。

- (2) 北宋、錢易の『南部新書』卷四にも次のように記す。

嚴憚字子重、善爲詩、與杜牧友善。皮陸常愛其篇什、有詩云、春光冉冉歸何處、向花前把一杯。盡日問花花不語、爲誰零落爲誰開。七上不第、卒於吳中。

なおこの詩は後蜀、韋穀編『才調集』卷十に雜詩十首の其二と同じであるが、「無名氏」の作として収める。

杜牧の「和嚴憚秀才落花」詩は左記の如く、皮日休が引用する嚴憚の詩と韻字を同じくする次韻詩である。但だこの詩がテキストとして最も信頼が置ける『樊川集』ではなく、やや時代が降って唐末に編纂されたといわれる『樊川外集』に収められており、皮日休引用詩と比べて、内容的にかなり同質のものがあることが却って不安にさせるものがある。

共惜流年留不得、且環流水醉流杯。無情紅豔年盛、不恨凋零却恨開。

- (3) 杜牧が池州刺史から睦州刺史に遷ったのは會昌五年(八四五)ではなく、翌年(八四六)の九月で、杭州刺史に遷ったのはその後四年(八五〇)の秋であったことは、繆鉞氏の『杜牧傳』(一九八〇年 人民文学出版

社)に詳しい。

- (4) 北宋の歐陽脩(一〇〇七—一〇〇七)も『六一詩話』の中で晩唐の鄭谷(八五一?—九一〇?)について述べつつ、自らの幼少期の読書体験を語っている。

鄭谷詩名盛於唐末、號雲臺編、而世俗但稱其官爲鄭都官詩。其詩極有意思、亦多佳句。但其格不甚高、以其易曉、人家多以教小兒。余爲兒時、猶誦之、今其集不行於世矣。

また『全唐文』卷七百二十四、李陽の「題惠山寺詩序」にも次のような作詩に関する記載がある。

太和五年(八三一)四月、予自江東將西歸潯陽、路出錫邑。困肄業於惠山寺、居三歲。其所諷念左氏春秋・詩・易及司馬遷班固史・屈原離騷・莊周・韓非書記及著歌詩數百篇。其詩凡言山中事者、悉記之於屋壁。

- (5) 『太平廣記』卷一百八十一「貢舉 四」は「程式」を「程試」に作る。

- (6) 『全唐五代詩格校考』(一九九六年陝西人民出版社)・『全唐五代詩格彙考』(二〇〇二年 江蘇古籍出版社)。

- (7) 前掲註(6)「詩格論(代前言)」参照。

- (8) 『日本国見在書目録解説稿 附同書目録索引』(一九五六年初版 一九七六年再版 小宮山出版)。

- (9) 羅根澤『中國文學批評史』「第四篇 隋唐文學批評史」「第二章詩格(上)・一 詩格的兩個時代」(典文出版社 一九六一年十一月一日郭紹虞序)

- (10) 前掲註(6)「詩格論(代前言)」参照。

- (11) 今村与志雄氏は『酉陽雜俎』(一九八一年 平凡社 東洋文庫四〇四)第五冊、第一八三頁の「逸文」の第九項にこの記事を掲げ、註(2)でこれが佚文であろうと記している。なおこれとはほぼ同じ記載は『全唐詩話』巻四にも見える。

- (12) 宋、葉廷珪『海錄碎事』巻十九「文學部下」「詩門」にも簡略な記事があり、明、胡震亨『唐音癸籤』巻二九にも次のような記載がある。

韻牒始段成式。段押句好押窮韻、惡韻。其平聲好韻不僻者、書竹簡、稱爲韻牒。又有遞聯、細斑竹爲之、以白金鎖首、如茶挾形、分客以免互送之煩、今韻牌之類是也。

- (13) この「句枝」については宋、劉才邵『樹溪居士集』巻二「和彭伯莊韻奉酬彭公達」詩に「句枝到手詩已就、四坐俯首甘罰觥」という句がある。

- (14) 蔣寅『大曆詩人研究』上編「第一章・九鮑防、顏真卿與大曆兩浙聯唱詩會」(一九九五年 中華書局 中国社会科学院青年學者文庫) 及び賈晉華『唐代集會總集與詩人群研究』(二〇〇一年 北京大學出版社) 参照。

- (15) 『太平廣記』巻二百三「王中散」の項にも『耳目記』を引いて次のような話を記している。

張道古(九〇八歿)與相善、每欽其道藝。傳著王逸人傳爲此也。道古名睨博學善古文、讀書萬卷而不好爲詩。曾在張楚夢座上、時久旱、忽大雨。衆賓皆喜而詠之。道古最後方成絕句曰、亢陽今已久、喜雨自雲傾。一點不斜

去、極多時下成。坐客重其文學之名而哂其詩之拙也。

- (16) 拙論「段成式の『寺塔記』所収の聯句について」(二〇〇一年 帝塚山学院大学中国文化研究会『中国文化論叢』第一〇号所収) 参照。

- (17) 因みに、張祜の「夕次桐廬」(『全唐詩卷五百十』)の第二聯には「晚潮風勢急、寒葉雨聲多」とある。

- (18) 張伯偉「摘句論」(原載『文學評論』一九九〇年第三期 二〇〇〇年『中國詩學研究』所収 遼海出版社)。

- (19) 那波利貞氏は「唐鈔本雜抄考——唐代庶民教育史研究の一資料——」(『支那學』第十卷特別号 一九四二年小島本田二博士還暦記念号 一九六九年弘文堂復刻版)と題する論文に於いて、当時の敦煌寺院を中心とした庶民の教育の実態を敦煌文献から明らかにしている。そこに引用される資料は中唐初期から中唐末期に作られたのではないかと那波氏が推定する「雜抄(P二七二二) 一名珠抄 二名益知文 三名隨身寶」という文書があり、その第六十行めに「文場秀」(孟憲子作)という書名が見え、これについて次のような言及がある。

『文場秀』も亦文章の教科書らしい。『日本國見在書目錄』小學條に『文場秀句』一卷の著録あれども撰者の名を記さぬ。『新唐書』藝文志、丁部に王起文場秀句一卷あり、卷數も書名も同であるから『日本國見在書目錄』所見の『文場秀句』は此の王起の撰したものであらう。

既に『文場秀句』が王起の撰なる上は『雜抄』所見の孟憲子撰の『文場秀』は全く別種の書籍たるに相違ないが

文場とは官吏登庸試験場の意とも解し得らるれば、登庸試験それも普通文官登庸試験たる郷試にて效用あるべき受験準備書たるを知るべく、先づ名文句の集、模範文集とも稱すべきものであらうが、郷試準備用のこととしてその程度は割合に低く、普通教育の作文の教科書としても使用されたものであらう。

また嚴耕望氏の山水寺院に於ける知識人の読書に着目した「唐人讀書山水寺院之風尚」(一九五九年『中央研究院歷史語言研究集刊』第三十本 下冊)も参照されたし。

- (20) 『唐人選唐詩十種』(中華書局上海編輯所 一九五八年北京中華書局景排印本)。

『唐人選唐詩新編』(一九九六年 陝西人民出版社)。また日本の唐人選唐詩に関する研究は次のようなものがある。

中沢希男「中興閒氣集考」(一九六二年『群馬大學紀要人文科學編』第十一卷)。

小川昭一「唐人選唐詩について」(『全唐詩雜記』所収 一九六九年 彙文堂書店)。

中沢希男「唐人選唐詩考」(一九七二年『群馬大學教育学部紀要』「人文・社会科学編」第二十二卷所収)。

- (21) 陳尚君『唐代文學叢考』(一九九七年 中國社會科學出版社) 所収。

- (22) 書名に関しては、前掲註(20)、中沢希男「中興閒氣集考」を参照。

(23) 拙論「令狐楚を通して見る元和の文学」(二〇〇二年 創文社『中国読書人の政治と文学』所収) 参照。

(24) 中沢希男氏は前掲註(20)「中興閑氣集考」で『極玄集』が『中興閑氣集』の主張を継ぎ一層それを明白にする目的で編せられていることを論証している。

『又玄集』については川北泰彦氏の「『又玄集』編纂時における韋莊」(一九七五年 九州大学『文学研究』第七十二輯)・拙論「韋莊の文学及其時代」―關於『又玄集』的編輯意圖―(一九九八年韓國順天郷大學校人文科學研究所『人文科學論叢』第六輯) 参照。

(25) 清の何焯は『御覽詩』の跋文に「此書又在『間氣集』之下、大抵大歴以還惡詩萃於是矣」(此書所采大都意凡文弱、流淡無味殆可當準勅惡詩耶)と酷評する(一九八九年 上海古籍出版社 傳增湘『藏園羣書題記』卷十九「集部九・總集類・斷代」参照)。

(26) 『唐詩紀事』卷二十九「于鵠」、『瀛奎律髓』卷三十「邊塞類」は「送客遊邊」に作っている。

(27) 『文苑英華』卷二百九十三「行邁五」及び『唐詩紀事』卷四十三「李宜遠」は「并州路作」に作っている。『樂府詩集』卷九十三「新樂府辭」「樂府雜題」では「塞下」に作り、李宜遠の作としている。

(28) 京都女子大学で開催されている東山之會では二〇〇四年二月まで『御覽詩』の訳註(顧況「題葉道士山房」まで)を行っていたが、そこで川合康三氏はこのように詩題が一般化さ

れている事象の有ることを指摘している。